

榛原町内遺跡発掘調査概要報告書 1998年度

榛原町文化財調査概要 21

2000

榛原町教育委員会

榛原町内遺跡発掘調査概要報告書 1998年度

榛原町文化財調査概要 21

2000

榛原町教育委員会

例　　言

1. 本書は、平成10年度（1998年度）に榛原町教育委員会が国庫補助事業・県費補助事業として実施した「榛原町内遺跡」の発掘調査概要報告書（榛原町文化財調査概要 21）である。
2. 発掘調査は、平成10年（1998年）5月11日に着手し、平成11年（1999年）3月31日に終了した。なお、本書の刊行は、平成11年（1999年）度事業として実施したものである。
3. 現地調査は、奈良県教育委員会及び奈良県立橿原考古学研究所の指導のもと、榛原町教育委員会生涯学習課技師 柳澤一宏が担当した。
4. 調査組織及び関係者は、「I 埋蔵文化財発掘調査の概要」に掲載している。
5. 方位は、基本的には座標北を指しているが、一部には磁北（M.N）も使用している。
6. 土層の色調は、『新版標準土色帖』1987年版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修（財）日本色彩研究所色票監修）を参考にしている。
7. 各遺跡の調査記録、出土遺物等は、榛原町教育委員会において保管している。
8. 本書の執筆・編集は、柳澤が行った。

目 次

I 埋蔵文化財発掘調査の概要	1
1 埋蔵文化財発掘調査等の概要	
2 調査組織等	
II 位置と環境	5
1 地理的環境	
2 歴史的環境	
III 天ノ森遺跡第1次発掘調査概要	7
1 調査の契機と経過	
2 位置と環境	
3 遺跡の調査	
4 まとめ	
5 抄録	
IV 丹切遺跡第8次発掘調査概要	11
1 調査の契機と経過	
2 位置と環境	
3 遺跡の調査	
4 まとめ	
5 抄録	
V 桧牧市場西垣内遺跡発掘調査概要	14
1 調査の契機と経過	
2 位置と環境	
3 遺跡の調査	
4 まとめ	
5 抄録	
VI 坊ノ浦遺跡第3次発掘調査(試掘調査)概要	20
1 調査の契機と経過	
2 位置と環境	
3 遺跡の調査	
4 まとめ	
5 抄録	
VII 下城・馬場遺跡第5次調査(測量調査)概要	26
1 調査の契機と経過	
2 位置と環境	
3 遺跡の調査	
4 まとめ	
5 抄録	
報告書抄録	30

I 埋蔵文化財発掘調査の概要

1 埋蔵文化財発掘調査等の概要

棟原町では、1968年（昭和43年）以降、土木工事等の開発行為に伴い、生活環境をはじめ、地理的環境・歴史的環境も大きく変化してきている。土木工事等の開発行為の増加とともに埋蔵文化財の発掘調査も町内各所で行われ、その後、周辺の山野とともに大きく景観を変え、遺跡はその姿を消している。

このような状況のもと、棟原町教育委員会では、1986年に町内遺跡の遺跡詳細分布調査を実施し、いわゆる「遺跡地図」の整備をはかり、「棟原町遺跡分布調査概報」を刊行した。その後、新たな調査成果等をもとに、1993年には『棟原町遺跡分布地図』を刊行し、「遺跡地図」の改訂を行い、埋蔵文化財の保存・活用をはかっていく基礎資料としている。

毎年、町内各所で開発行為が計画・実施されているが、埋蔵文化財の取り扱い等については、「棟原町遺跡分布地図」をもとに事業者等とその都度、協議を重ねているところではあるが、「遺跡地図」の改訂が必要な時期ともなってきている。

1998年度（平成10年度）に棟原町教育委員会が取り扱った遺跡有無確認踏査願、埋蔵文化財発掘届・通知、発掘調査件数等は表1のとおりである。また、1998年度（平成10年度）に実施した発掘調査等は表2・図1のとおりである。なお、本書には国庫補助事業・県費補助事業として実施した天ノ森遺跡、丹切遺跡、桧牧市場西垣内遺跡、坊ノ浦遺跡、下城・馬場遺跡の調査概要を収録している。

表1 1998年度（平成10年度）発掘届・発掘調査件数等一覧表

遺跡有無 確認踏査願	埋蔵文化財 発掘届	埋蔵文化財 発掘通知	埋蔵文化財 発掘届・通知合計	発掘調査 (棟原町担当)	立会調査 (棟原町担当)	測量調査 (棟原町担当)	調査件数 合計
1	3	0	3	4	1	2	7

摘要 種別	遺跡名	所在地	調査原因	原 因 者	工事面積	措 置 等
遺跡有無確認踏査願	〈未定〉	棟原町自明	住宅開発工事	大倉建設㈱	35ha	遺物散布地・古墳状隆起、事業未着手
埋蔵文化財 発掘届・通知	天ノ森遺跡	棟原町萩原	個人住宅建設工事	依岡繁己	201m ²	発掘調査 (本書所収)
	戎場遺跡	棟原町戎場	個人住宅建設工事	中村尚史	723m ²	立会調査
	丹切遺跡	棟原町萩原	個人住宅建設工事	豊田國輔他	360m ²	発掘調査 (本書所収)

表2 1998(平成10)年度発掘調査等一覧表

番号	調査別	検原町歴史調査番号	遺跡名	調査地	現地調査期間	調査原因(原因者)	調査概要		遺跡概要備考	
							測量面積(m ²)	測量機器		
1	免掘調査	1-23 12-D-10	天ノ森遺跡 (1次調査)	検原町検原元萩原 5201-4 5201-5	1988・5・19 ~1998・6・4 (住民調査)	個人住宅建設 工事	6	なし	土師器、瓦器 本書所収	
2	免掘調査	1-98 15-B-8	丹沢遺跡 (8次調査)	検原町検原元萩原 527-1 527-2	1989・3・11 ~1999・3・31 (住民調査)	個人住宅建設 工事	6	なし	土師器 本書所収	
3	免掘調査	2-626 15-B-555	松牧 市場西側内側跡 (1次調査)	検原町治松 798、799、 213-1、214-1	1988・12・24 ~1988・12・26 (検原町)	闇営業工事 工事	204	自然堆积、磚 瓦器、陶器、 磁器	サスカイト片、古式 土師器、瓦器、陶器、 磁器 本書所収	
4	免掘調査	4-3 103-51	坊ノ前遺跡 (3次調査)	検原町治松1075地 検原町自明136地	1988・10・19 ~1999・3・31 (検原町)	闇営業工事 工事	約2400	瓦、土器、ピット、 茅根繩 土器、深埋器、瓦器、 漆器、磁器	サスカイト片、古式 土器、深埋器、瓦器、 漆器、黑色土器、瓦器、瓦 中世の住居跡 本書所収 1995年度本調査	
5	測量調査	1-56 1-57 12-D-31 12-D-32	北谷古墳群 (北谷西古墳・ 北谷東古墳)	検原町長峯 1168 検原町富地 299	1988・4・29 ~1998・7・6 (検原町)	北谷西古墳 (5次調査)	42m、後 円頂、全長42m、後 円頂24m、前方盛 幅25m、横穴式石室 北谷東古墳 直径17m、横穴式石室	古方後 円頂、全長42m、後 円頂24m、前方盛 幅25m、横穴式石室 北谷東古墳 直径17m、横穴式石室	古方後 円頂 横穴式石室 北谷東古墳 直径17m、横穴式石室	測量調査
6	測量調査	2-546 15-D-90	下塚・馬場遺跡 (5次調査)	検原町下塚 1292地	1989・3・1 ~1999・3・31 (検原町)	馬場遺跡 工事	平坦面地		測量調査	
7	立会調査	3-1 3-2 103-9 103-10	成吉遺跡	検原町立会 161-4	1987・6・24 (中村当史)	個人住宅建設 工事	なし	なし	本書所収 測量調査 中世の居館跡	

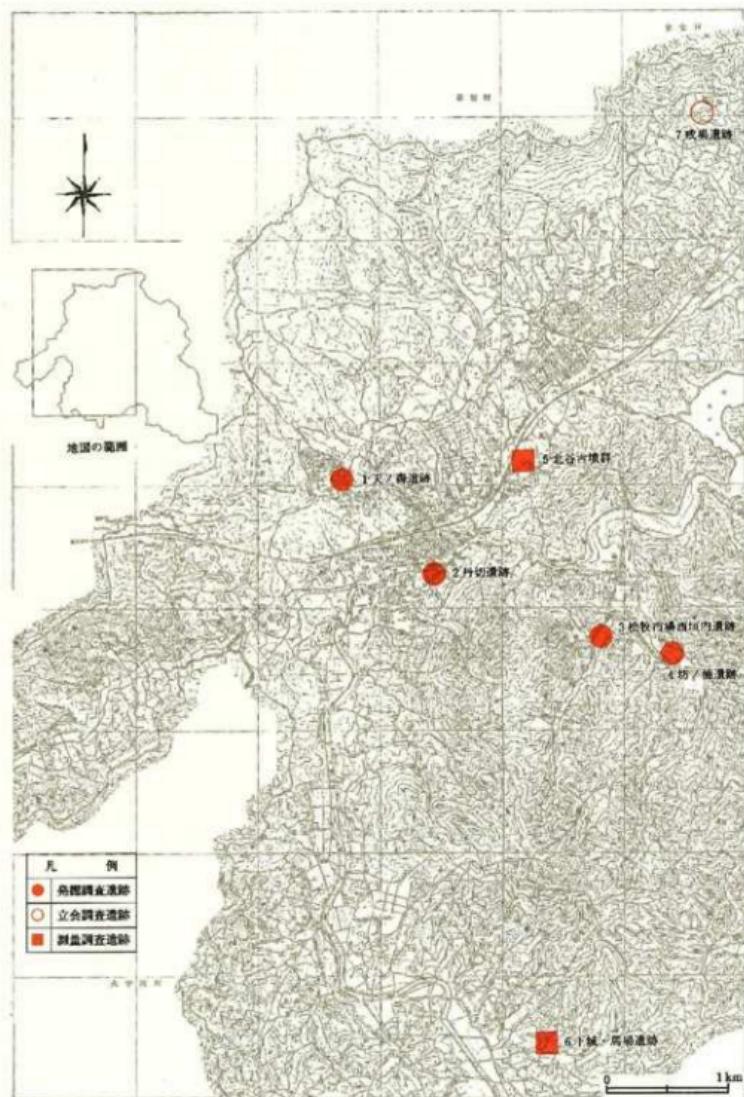


図1 1998(平成10)年度 調査遺跡位置図

2 調査組織等

現地調査及び整理作業等の関係者は、次のとおりである（敬称略）。

1998年度（平成10年度）

総括 教育長 田村義治

庶務 事務局長 栗野雅治

教育次長 福井三男（生涯学習課長事務取扱）

生涯学習課

主 幹 藤田ユミ子（～1998年10月）

課長補佐 林 宏典（～1998年12月）

安達宗弘（1998年12月～）

打越明美（1998年12月～）

調査 技師 柳澤一宏

補助員 井上好美、南信子、奥野信子、巽康彰、福角剛男

作業員 池田圭子、遠藤晴見、遠藤久子、籠庵トシ子、櫛静子、粉川君江、粉川キミエ、城山巖、大門静、田中ヤエ、中谷喜代子、古川マサエ、古城シズ子、戸内秀子

業務委託 (株)ワールド、(株)大門測量設計事務所

指導 奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所

協力 依岡繁己、豊田國輔、坊ノ浦は場整備実行委員会、橿原町役場産業課

1999年度（平成11年度）

総括 教育長 田村義治

庶務 事務局長 栗野雅治（～1999年11月）

池野 隆（1999年11月～）

教育次長 福井三男（～1999年11月）

山本米三（1999年11月～）

生涯学習課

課長 中村好三（1999年11月～）

課長補佐 安達宗弘

打越明美

整理 技師 柳澤一宏

補助員 井上好美、永野仁、横澤慈、上西高登、岡田諭、坂佳彦、井上雅善

指導 奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所

助言 泉 拓良、植野浩三

II 位置と環境

1 地理的環境

奈良盆地の東方の山間部に宇陀と呼ばれている地域が広がっており、現在の行政区画では大字宇陀町、榛原町、菟田野町、室生村、曾爾村、御杖村からなっている。この宇陀地方は地理的な状況から西半と東半に大別でき、一般に前者が「口宇陀」、後者が「奥宇陀」とも総称されている。口宇陀は標高300～400mの丘陵とこの間を縫って流れる中小河川が複雑に入り乱れ、これらが幾つもの小盆地や浅い谷地形を形成しており、口宇陀盆地とも呼ばれ、大字宇陀町、榛原町、菟田野町の大半がここに含まれている。これに対し、東部の奥宇陀は室生山地、高見山系などの鋭い山々が連なっており、奥宇陀山地とも呼称されている。口宇陀地域の主要河川は、西に宇陀川、東に芳野川があり、幾つもの小河川を合わせながら榛原町荻原で宇陀川本流となる。榛原町を後にした宇陀川は三重県で名張川となり、木津川、淀川を経て遠く大阪湾へと至り、大和川流域とは水系を異にしている。

榛原町の周囲は概ね標高約400～800mの山塊に囲まれ、東は高城岳、三郎岳、室生村へと通じる石割峠があり、北は大和高原とを区切る額井岳、香駒山、鳥見山などの山々が屏風状に連なり、宇陀の地を見下ろしている。西は桜井市や大字宇陀町、南は菟田野町となっており、丘陵稜線をもってそれぞれの境界としている。地形的にみれば榛原町の西半は口宇陀的、東半は奥宇陀的な様相を呈している。



図2 榛原町位置図

2 歴史的環境

宇陀地方は、『古事記』、『日本書紀』をはじめとする多くの文献に度々登場し、これらの内容等からこの地は軍事・交通の要衝であったことを窺い知ることができ、今に残る地名や伝承なども多い。また、榛原町を流れる宇陀川・芳野川・内牧川流域の各所には多くの遺跡が分布しており、発掘調査・分布調査を重ねたびにその数も増加している。

これまでに、宇陀郡内では4点の有舌尖頭器が出土しており、うち、3点が町内から出土していることが明らかとなっている。これらは、旧石器時代末期から縄文時代草創期に求めることができ、この頃が宇陀の歴史の初源であろう。

縄文時代の遺跡の多くは、先述の河川流域の河岸段丘上、尾根上、谷部等に認められる。これらの遺跡の多くは、採集遺物によっているため、その実態が必ずしも明らかとはいえない。また、発掘調査によって確認された場合でも、数点の遺物が出土しているのみで遺跡の全容が明らかになったものは少ない。このような状況のもと高井遺跡では、早期から後期にわたる集落跡であることが発掘調査によって明らかとなっている。

弥生時代前期から中期の遺跡は、沢遺跡、下城・馬場遺跡、大貝ヒジキ山遺跡、上井足北出遺跡をはじめとする数遺跡が知られているにすぎないが、後期の遺跡は比較的多く認められる。これらは、地理的制約のためか奈良盆地で見られるような大規模な集落ではないが、次代の古墳時代へと継続するものが多い。

弥生時代後期から古墳時代前期の墳墓である台状墓は、これまでに野山遺跡群、能峰遺跡群、下井足遺跡群、大王山遺跡群、キトラ遺跡などで確認されている。弥生時代後期の集落としては、高冢遺跡、能峰中島遺跡、上井足北出遺跡、古墳時代の集落としては、先の遺跡の他、戸石・辰巳前遺跡、高田垣内遺跡、谷遺跡、石榴垣内遺跡などを挙げることができ、谷部を流れる川跡や堅穴式住居跡などが確認されている遺跡もある。

古墳時代前期の古墳は谷畠古墳、中期の古墳としては高山1号墳、シメン坂1号墳、前山1号墳などが発掘調査によって明らかにされている。後期となると古墳數は著しく増加し、ある程度の粗密があるものの、町内各所の尾根上には數基から十数基単位で分布している。5世紀後半から盛期を迎える古墳群は野山古墳群、沢古墳群、栗谷古墳群、大王山古墳群、丹切古墳群などが知られている。6世紀後半以降、今までの木棺直葬墳にかわって横穴式石室墳が築造されるようになり、丹切古墳群、能峰古墳群、石田古墳群、大貝古墳群、西谷古墳群をはじめ、多くの古墳が発掘調査によって状況が明らかになっている。

横穴式石室にかわる新しい葬法として火葬墓が登場してくるが、最も代表的なものが、壬申の乱で活躍した將軍のひとりで渡来系氏族でもある文祢麻呂の墳墓である。現在、墳墓は史跡、墓誌などの出土品は国宝となっている。

古代末には、宇陀においても莊園の開発が急速に進み、このなかで台頭してきた在地武士団は、興福寺、春日社などの支配のもと各自が発展を続けた。この武士団は「宇陀三人衆」の秋山氏・澤氏・芳野氏に代表され、彼らは秋山城、澤城、芳野城をそれぞれの居城としていた。また、小規模な城館跡も各所に点在しており、城館の廃絶後、中世墓地と化したところもある。いわゆる中・近世墓地は、まとまつたところでは、大王山遺跡、能峰遺跡群、八咫鳥遺跡群、野山遺跡群などが発掘調査により明らかにされている。

紙幅の都合上、多くを述べることができないが、「位置と環境」は、以前からも他の報告書等で触れられており、詳細は次の文献をご覧いただきたい。

- 『宇陀・丹切古墳群』 奈良県教育委員会 1975
- 『大王山遺跡』 棚原町教育委員会 1977
- 『能峰遺跡群』 I 奈良県教育委員会 1986
- 『下井足遺跡群』 奈良県教育委員会 1987
- 『野山遺跡群』 I 奈良県教育委員会 1988
- 『高田垣内古墳群』 奈良県教育委員会 1991
- 『大和宇陀地域における古墳の研究』 宇陀古墳文化研究会 1993
- 『石榴垣内遺跡』 奈良県教育委員会 1997

III 天ノ森遺跡第1次発掘調査概要

1 調査の契機と経過

天ノ森遺跡は、縄文時代～古墳時代、中世の遺物散布地として、奈良県遺跡地図ならびに榛原町遺跡地図に登載しているところである。この範囲の一部において、個人住宅建設工事が実施されることとなり、1998年4月には、埋蔵文化財発掘届が提出された。その後、関係機関等が遺跡の取り扱い・発掘調査の実施方法等を協議した結果、榛原町教育委員会において発掘調査を担当することになった。遺構・遺物の状況等が明らかでないため、これらを確認する確認調査（試掘調査）を実施することとした。現地調査は、事務手続等ののち、1998年（平成10年）5月19日から6月4日まで断続的に実施した。

2 位置と環境

天ノ森遺跡は、近鉄榛原駅を中心とする市街地の北西約700mに位置し、標高約340m～約354mの尾根上に立地する。遺跡西半及びこれに隣接する地域は、宅地化が進行しており、以前とはその様相を異なる（図3、図版1・2）。

遺跡の詳細は、明らかではないが、これまでに縄文時代～古墳時代、中世の遺物が採集されており、碧玉製の管玉も含んでいたという。遺跡東半（現在の山林・畠地）には、文安6年（1449）まで墨坂神社（崇神天皇9年創祀・『日本書紀』）が鎮座していたといわれ、現在、秋の例祭には、この旧社地近



図3 天ノ森遺跡と周辺主要遺跡位置図

くにお旅所を設け、神輿を迎えている。

遺跡の南に隣接する地域は「墨坂」伝承地、西方には、古代大和と字陀とを画した「西峠」がある（図4）。大和と東国とを結ぶ古代からの主要交通路の要衝でもあり、この地は度々、記紀に登場するところもある。この遺跡の南方にはキトラ遺跡（台状墓・中世墓群）、谷畑古墳（前期古墳）、谷畑中世墓群、神木坂古墳群（後期～終末期古墳・中世墓等）、井之谷遺跡群（後期～終末期古墳・中世墓群等）、北方には清水谷遺跡（弥生時代～古墳時代、中世の遺物散布地）などが位置する。

調査地南隣の「西峠会所」には、平安時代後期の薬師如来坐像が安置されており、また、周辺の道路工事の際には、五輪塔などの石造物が出土したという。

3 遺跡の調査

(1) 調査区と基本土層（図5～7、図版2）

すでに、工事施工業者が建物基礎工事に着手していたため、調査対象地のうち、東端の一部分（南北



図4 天ノ森遺跡調査対象地位置図

3.1m、東西1.6m)を調査したにすぎない。

調査区の上半は、すでに表土が除去されており、土層の詳細は明らかにできないが、調査区南半では赤褐色粘質土(1層)、褐色粘質土(2層)、明褐色粘質土(3層)、風化花崗岩を含む明褐色粘質土(地山)となっている。

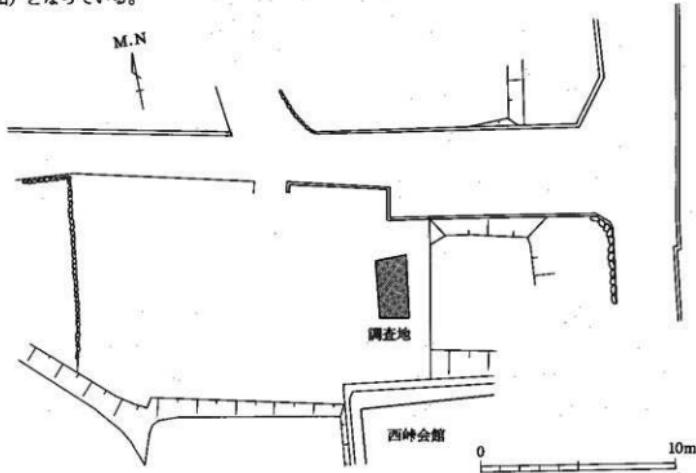


図5 天ノ森遺跡調査位置図(1)

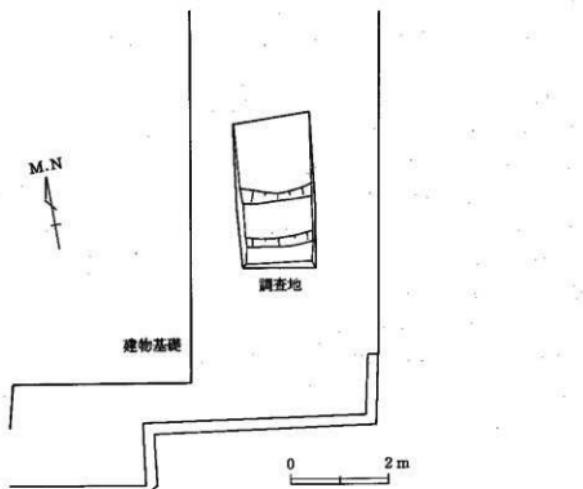


図6 天ノ森遺跡調査位置図(2)

L=350.5m

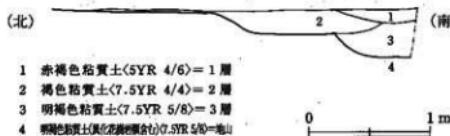


図7 天ノ森遺跡土層断面図

瓦器皿片には二次焼成が認められるものがある。

4 ま と め

今回の発掘調査は、調査面積が限られたこともあり、十分なものとはいえないが、調査地周辺における土地利用時期の一端（13世紀前葉～14世紀前葉）を明らかにすることができた。調査地南隣の「西峰会館」の周辺には、五輪塔や石仏などが数多く安置され、また、詳細な来歴は明らかでないものの優美な薬師如来坐像（平安時代後葉）が伝えられていること等から、寺院の存在も考えられる。

周辺は、後世の土地利用の影響で、遺構面が削平されている可能性も考えられるが、今後も発掘調査の継続が必要なところである。

5 抄 錄

遺 跡 名	天ノ森遺跡(榛原町遺跡地区番号 1-23、奈良県遺跡地図番号 12-D-10)
調 査 地	奈良県宇陀郡榛原町大字萩原 元萩原2501-4、2501-5
遺 跡 立 地	標高約340m～354mの尾根上、尾根斜面
遺 跡 規 模	南北約100m、東西約250m
時 代・種 別	縄文時代～古墳時代、中世の遺物散布地
調 査 主 体	榛原町教育委員会
調 査 原 因	個人住宅建設工事
現 地 調 査 期 間	1998年5月19日～1998年6月4日
調 査 面 積	6 m ²
検 出 遺 構	なし
検 出 遺 物	土師器、瓦器（1袋）
資 料 等 の 保 管	榛原町教育委員会（文化財整理室）

IV 丹切遺跡第8次発掘調査概要

1 調査の契機と経過

丹切遺跡は、縄文時代から中世にいたる遺物散布地で、奈良県遺跡地図番号15-B-8、榛原町遺跡地図番号1-98として登載しているところである。遺跡北東端の住宅地内において個人住宅の改築工事が計画され1999年2月には、埋蔵文化財発掘届が提出された。関係機関等が、遺跡の取り扱い・発掘調査の実施方法等を協議した結果、榛原町教育委員会において発掘調査を担当することとなった。

遺構・遺物の有無を確認する確認調査（試掘調査）を行うこととし、現地調査を1999年（平成11）3月11日に着手し、測量調査を含めて同年3月31日に終了した。なお、丹切遺跡の発掘調査は、1985年の第1次調査以降、今回で第8次を数えることとなる。

2 位置と環境

調査地は、榛原の市街地の南端部にあたり、丹切古墳群から宇陀川へと緩やかに北へ傾斜する水田地帯にある。1949～1950年にかけて宇陀川の河川改修が行なわれ、新宇陀川（現在の宇陀川）が完成し、これによって、榛原駅前の市街化が進み、丹切遺跡の多くは宅地化が進行し、調査地西側は、土地区画整理事業等による宅地となっている。調査地周辺から東半部は、多くの水田が残り遺跡が比較的良好な状況で保たれているが、遺跡の様相等は不明な点も多い。（図8、図版1・3）。

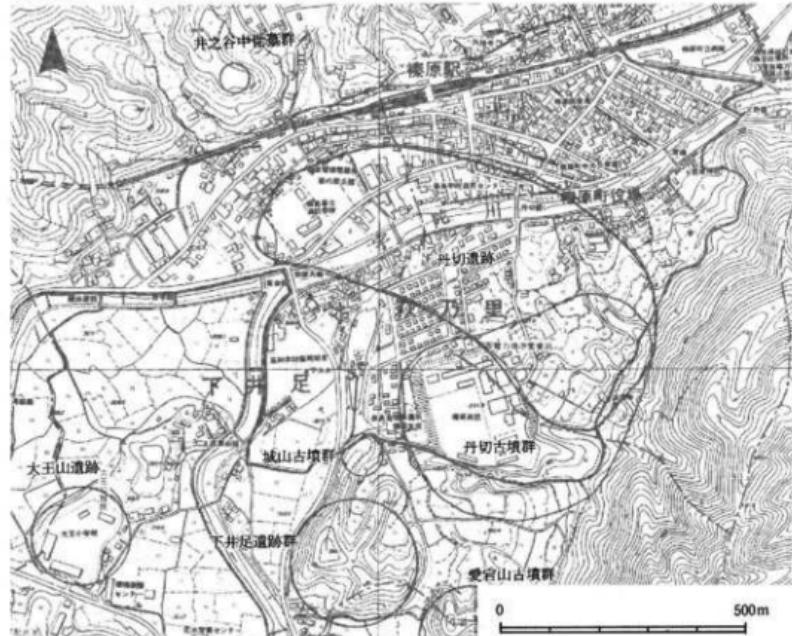


図8 丹切遺跡と周辺主要遺跡位置図

3 遺跡の調査

(1) 調査区と基本層序 (図9～11、図版4)

工事予定地（面積：約360m²）のうち、住宅建設予定地内のやや西よりの地点にトレッセ（長さ約3m、幅約2m）を設定し、遺構・遺物の検出に務めた。

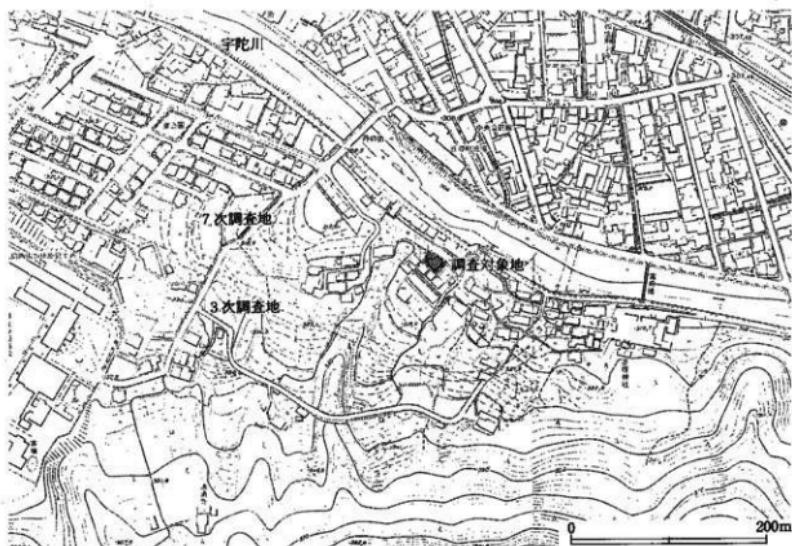


図9 丹切遺跡調査対象地位置図

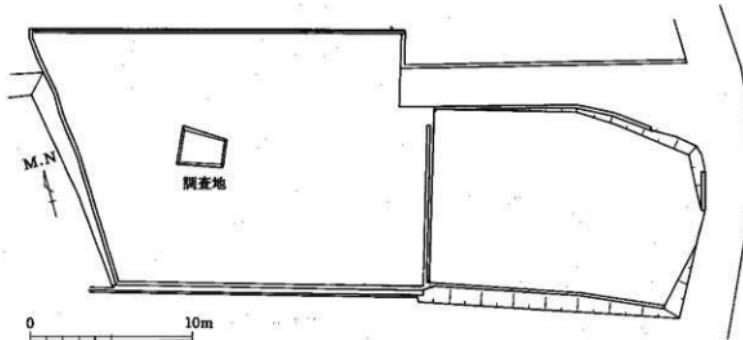


図10 丹切遺跡調査位置図

基本層序は第1層が整地土(厚さ約30cm)、第2層が灰色土(厚さ約20cm)、第3層がオリーブ褐色土(厚さ約30~50cm)、第4層が黄灰色粘土である。工事時の立会では、第4層のさらにその下方には、青灰色粘土(第5層)の堆積を確認している。

(2)検出遺構

調査地は谷地形の中央部分に相当するものと考えられ、明確な遺構は認められない。

(3)出土遺物

第4層から摩滅した土師器細片が出土したにすぎない。明確な時期は明らかにできないが、中世期のものと推定される。

4 ま と め

丹切古墳群から宇陀川へと灌ぐ旧河川は、いくつかあったと考えられ、今回の調査地もその一つであったと考えられる。工事予定地の面積及び工事の性格等から、谷部分の掘り下げを深く行わないこととしたが、谷地形の下流付近に相当することから、本来の谷底は深いものと推定される。旧河川が機能していた明確な時期は明らかにできないが、中世には埋没し、現地形に近い景観を呈するようになったと考えられる。地形図を見ると、上方(南方)の谷部分や尾根周辺に遺構・遺物の多くが埋蔵されている可能性が高いが、今後の調査に期待するところが大きい。

本調査地の西方、第3次調査地では、奈良時代~平安時代の遺物が多く出土した自然流路、第7次調査地では、弥生時代~古墳時代の遺物が多く出土した自然流路を確認しており、それぞれの上流部分で居住域を推定しているところである。

5 抄 錄

遺 跡 名	丹切遺跡 (棟原町遺跡地図番号 1-98、奈良県遺跡地図番号 15-B-8)
調 査 地	奈良県宇陀郡棟原町大字荻原 元荻原537-1、537-2番地
遺 跡 立 地	標高約312~314mの谷部
遺 跡 規 模	南北約700~800m、東西約300~400m
種 別	縄文時代~中世の遺物散在地
調 査 主 体	棟原町教育委員会
調 査 原 因	個人住宅建設工事
現地調査期間	1999年(平成11) 3月11日~同年3月31日
発掘調査	1999年(平成11) 3月11日
基準点等測量	1999年(平成11) 3月11日~同年3月31日
調査面積	6 m ²
検出遺構	明確な遺構なし(谷地形)
検出遺物	土師器(1袋)
資料等の保管	棟原町教育委員会(文化財整理室)



V 桧牧市場西垣内遺跡発掘調査概要

1 調査の契機と経過

桧牧市場西垣内遺跡は、中世の遺物散布地として「榛原町遺跡地図番号2-626」として登載しているところであるが、榛原町が行う開発行為（圃場整備工事）に伴う事前の「遺跡有無確認踏査」によってその範囲の広がりが予想された。この後、1997年12月に埋蔵文化財発掘通知が提出され、関係機関等が遺跡の取り扱い・発掘調査の実施方法等の協議を行い、発掘調査は、榛原町教育委員会が担当することとなった。当遺跡の構造・遺物の状況が明らかでないため、まず、確認調査を実施することとした。その状況によっては、改めて協議を行うこととした。現地調査は1998年（平成10）12月24日に着手し、立会調査を含めて1999年（平成11）3月31日に終了した。なお、遺跡の名称は、大字名と地区名（垣内名）から桧牧市場西垣内遺跡とした。

2 位置と環境

本遺跡は、榛原の市街地から南東約2kmに位置し、当地の主要河川のひとつである内牧川へと灌ぐ西谷川下流域に広がる。確認調査は、西谷川本流とその小支流との合流付近を中心とした下流域（標高約313m～320m付近）をその対象としている（図12、図版5）。

遺跡下方の西谷川と内牧川との合流付近には、式内社の御井神社が鎮座し、「市場」、「馬場」等といった呼称も残されている。内牧川に沿う国道369号線は、大和と伊勢とを結ぶ「伊勢本街道」もある。

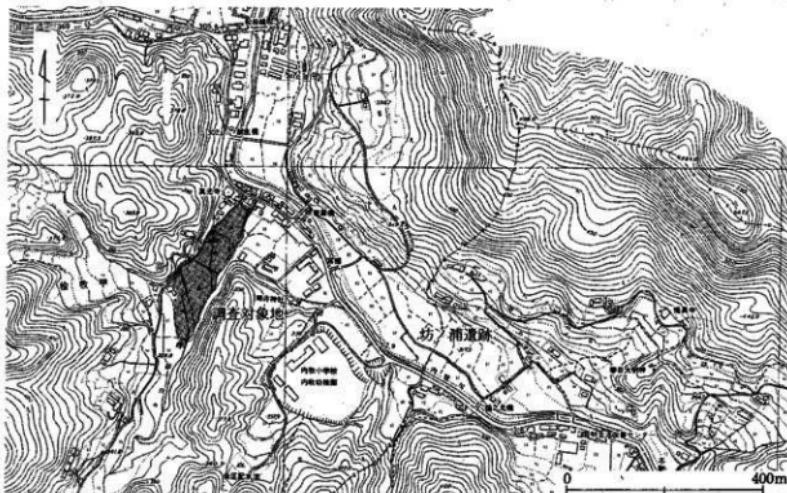
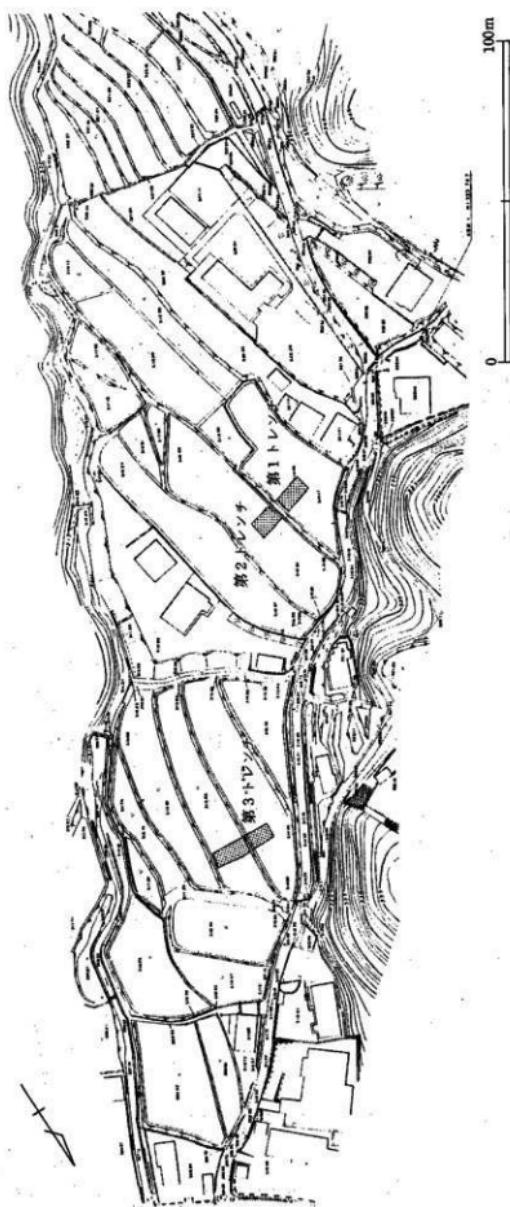


図12 桧牧市場西垣内遺跡調査対象地位置図

図13 桧牧市場西面内遺跡調査位置図



3 遺跡の調査

標高約313m～320m付近の水田を今回の調査対象としており、確認調査のトレンチを3ヵ所に設定した（図13）。以下、各トレンチの状況を概述する。

第1トレンチ

（1）基本層序（図16）

基本層序は第1層が耕作土、第2層が水田床土、第3層が近代以降の整地土、第4層が旧水田耕作土、5層が旧水田床土、第6層がオリーブ褐色粘質土、第7層が灰オリーブ色砂礫の地山となっている。

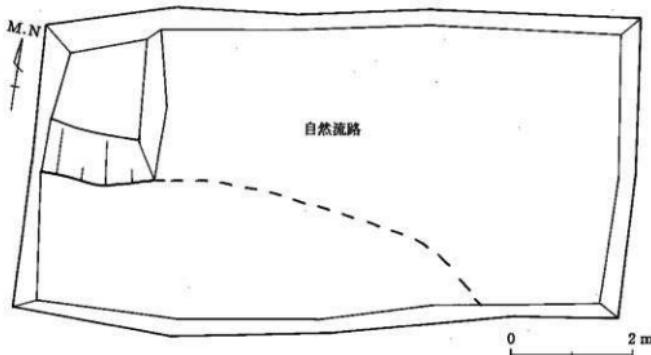


図14 桧牧市場西垣内遺跡第1トレンチ平面図

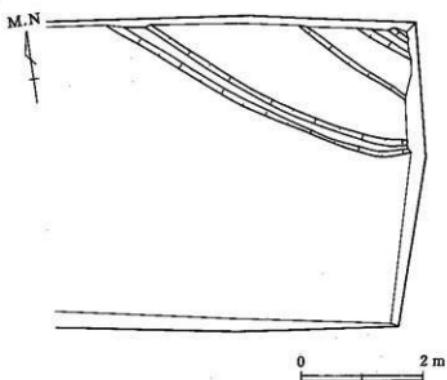


図15 桧牧市場西垣内遺跡第3トレンチ遺構平面図

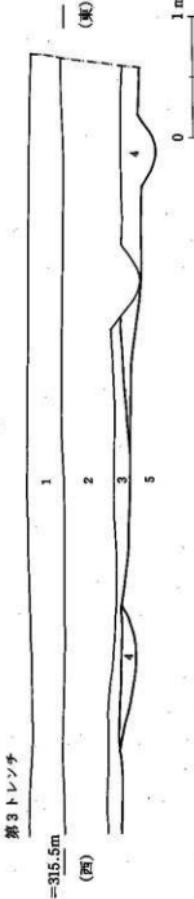
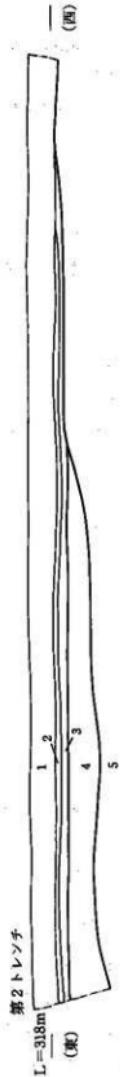
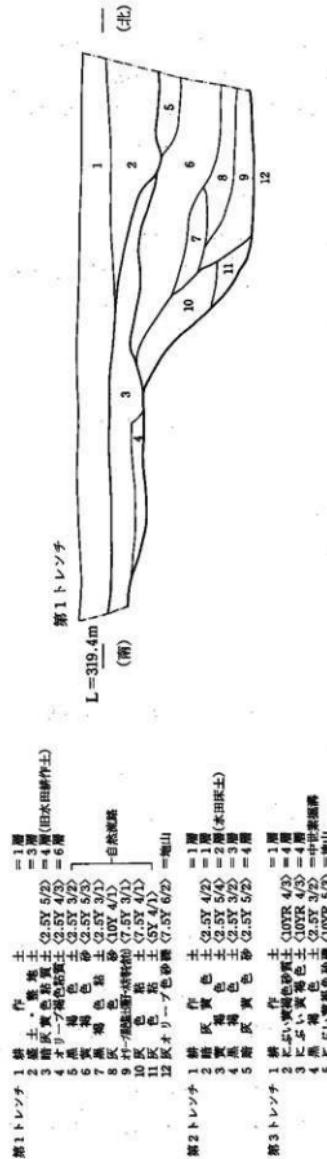


図16 桧枝市場西垣内溝跡土壌断面図

(2)検出遺構（図14、図版6）

西から東へと流れる自然流路の南岸の一部を検出している。工事計画によると掘削等が自然流路検出面にまで及ばないところから、トレンチ西端において土層・遺物等の状況の確認にとどめた。層序は基本的に砂と粘土の互層となっており、各層からは古式土師器等の遺物が出土している。最下層は植物遺体や種子、焼木片等を含むオリーブ黒色粘土となっており、湧水も多い。なお、護岸等の施設は認められない。

(3)出土遺物

自然流路内からは、古式土師器（小形丸底壺、甕）が出土しており、自然流路南側のオリーブ褐色粘質土（第6層）からは、サヌカイト、須恵器（甕）、土師器（皿、土釜）、瓦器（椀）、陶器（甕）磁器（椀）等が出土している。

第2トレンチ

(1)基本層序（図16）

第1トレンチの東隣の一帯低い水田に設定した。

基本層序は第1層が耕作土、第2層が水田床土、第3層が黒褐色土、第4層が暗灰黄色砂となっている。

(2)検出遺構（図版7）

第4層が第1トレンチで確認した自然流路堆積土の一部と考えられ、その一部を掘削したが明確な層序の相違は認められなかった。

(3)出土遺物

第3層より中世の土師器（甕）の破片が出土しているにすぎない。

第3トレンチ

(1)基本層序（図16）

基本層序は第1層が耕作土、第2層が現代の整地土、第3層が旧耕作土、第4層がにぶい黄褐色砂質土等、第5層がにぶい黄褐色砂礫の地山となっている。

(2)検出遺構（図15、図版7）

トレンチの東端において黒褐色土を埋土とする2条の素掘溝を検出した。

(3)出土遺物

第4層から須恵器（甕）、土師器（甕）、陶磁器などが出土している。

4 ま と め

第1トレンチで確認した自然流路の一部は、旧西谷川のものではなく、西方から西谷川へと灌ぐ旧小支流のものと考えられ、調査地北隣の山裾には、現在の小支流が西谷川へと流れている。大きな改変を伴わない地区であり、圃場整備工事という性格上、全面的な発掘調査を行っていないが、流路内からは布留1式に比定される古式土師器が比較的まとまった状況で出土している。このことから、上流域及びその周辺に当期の集落等の存在が予想されるが、その範囲等は、現段階では明らかにできない。西谷川を含めた内牧川流域には、これまでに4世紀代の遺物の出土は認められず、今回の調査での出土例が初見となる。

東方約400mの内牧川右岸の河岸段丘上に広がる「坊ノ浦遺跡」では、弥生時代後期、古墳時代（5～6世紀）の遺物がまとまって出土しており、両遺跡とも内牧川流域の開発の歴史を考える上において重要な位置にある。

なお、出土遺物については、現在、整理中であり、別途報告を行うこととしたい。

5 抄 錄

遺 跡 名	検牧市場西垣内遺跡（榛原町遺跡地図番号 2-626、奈良県遺跡地図番号 15-B-555）
調 査 地	奈良県宇陀郡榛原町大字検牧798、799、213-1、214-1番地
遺 跡 立 地	標高約313～340mの谷部
遺 跡 規 模	南北約250m、東西約300m 面積約20,000m ²
種 別	弥生時代～古墳時代、中世の遺物散布地
調 査 主 体	榛原町教育委員会
調 査 原 因	圃場整備工事
現地調査期間	1998年（平成10）12月24日～1999年（平成11）3月31日
発 掘 調 査	1998年（平成10）12月24日～同年12月26日
立 会 調 査	1999年（平成11）3月1日～同年3月31日（適宜）
調 査 面 積	204m ²
検 出 遺 構	自然流路、溝
検 出 遺 物	サヌカイト、古式土師器、須恵器、土師器、瓦器、陶器、磁器（整理箱 1箱）
資料等の保管	榛原町教育委員会（文化財整理室）

VI 坊ノ浦遺跡第3次発掘調査（試掘調査）概要

1 調査の契機と経過

榛原町自明・松牧に所在する坊ノ浦遺跡は、縄文時代から中世の遺物散布地として遺跡地図に登載（榛原町遺跡地図番号4-3、奈良県遺跡地図番号103-51）しているところである。この遺物散布地内の大半において、榛原町を事業主体とする圃場整備工事が実施されることとなり、1998年2月には、埋蔵文化財発掘通知が提出された。その後、関係機関等が遺跡の取り扱い及び調査方法等を協議した結果、まず、遺構・遺物の有無等を確認する試掘調査を実施し、その状況によっては、別途協議を行い、本調査を実施することとなった。榛原町教育委員会が現地調査を1998年（平成10）10月19日より開始したが、後述のとおり多くの遺構・遺物を検出したので、改めて協議を重ね、1999年度も引き続いて発掘調査を行った。

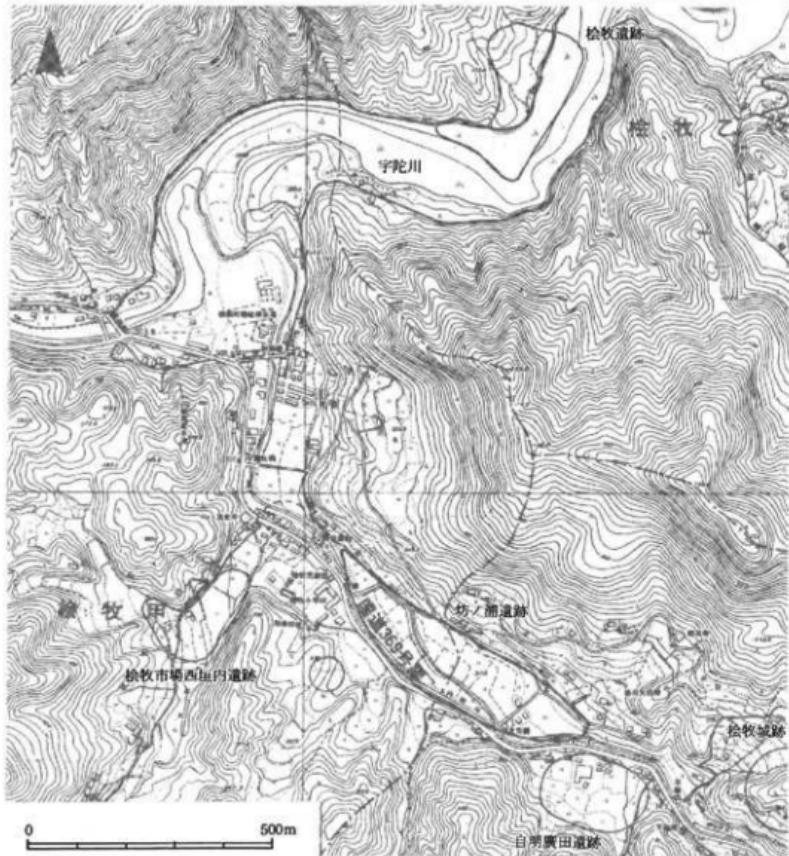


図17 坊ノ浦遺跡と周辺遺跡位置図

なお、1999年12月には本調査が終了し、現在、調査資料や出土遺物の整理作業中である。

2 位置と環境

坊ノ浦遺跡は、榛原町の市街地から約2.5kmの東方、内牧川右岸の段丘上を中心として標高約310~320mの水田地帯に広がっている。明確な遺跡の範囲は明らかにできないが概ね南北約150m、東西約600mが遺跡の範囲と推定している（図17、図版8）。

遺跡の東方約1kmには中世の山城・桧牧城跡、対岸の南方約250mには奈良時代から中世の遺物散布地の内牧小学校遺跡が位置している。また、遺跡南端の内牧川沿いには、大和と伊勢とを結ぶ「伊勢本街道」が通り、現在その役割は国道369号線が担っている（図17）。

3 遺跡の調査

(1) 既往の発掘調査

1986年、1988年、1989年、1990年、1994年に立会調査、1994年、1998年に小規模な発掘調査を実施しているが、遺跡の詳細は明らかでなかった。

(2) 調査区・基本層序

今回の調査は、遺跡の範囲と推定している水田の大半を調査対象としており（図18）、1998年度は工事予定地内に31ヵ所のトレンチを設定した（図19、図版9）。

基本土層は、トレンチによって相接するものの平坦部分においては、第1層が耕作土、第2層が水田床土、第3層が褐色系または灰色系の遺物包含層（中世）となっている。第3層の下は、多くが地山面となっており、数時期の遺構が広がっている（図20）。また、詳細は未確認であるが、一部において第4層（繩文時代を主体とする遺物包含層）の広がりも認められる。

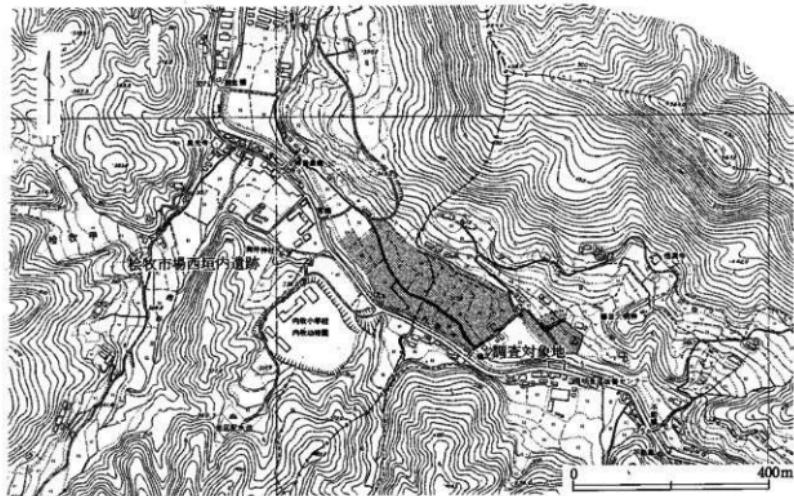
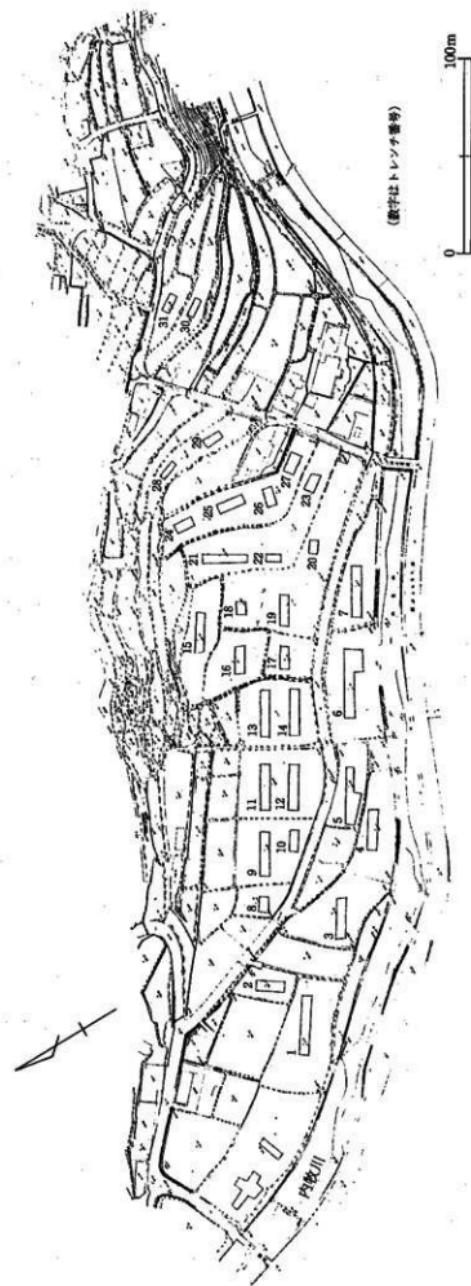


図18 坊ノ浦遺跡調査対象地位置図

図19 坊ノ前遺跡試掘調査位置図



(3) 検出遺構・出土遺物

表3・4のとおりである。

表3 坊ノ浦遺跡試掘調査検出遺構等一覧表

調査区名	主な検出遺構	遺構の時期	措置等
第1トレンチ	溝、素掘溝、土坑、ピット	中世	調査終了・埋め戻し
第2トレンチ	土坑、落込み遺構 素掘溝、ピット	縄文時代 中世	調査終了・埋め戻し
第3トレンチ	素掘溝、土坑、ピット	中世	調査終了・埋め戻し
第4トレンチ	溝	中世?	調査終了・埋め戻し
第5トレンチ	溝 竪穴式住居 掘立柱建物、土坑、ピット	弥生時代後期 古墳時代 中世	本調査
第6トレンチ	土坑 素掘溝、土坑、ピット	古墳時代 中世	調査終了・埋め戻し
第7トレンチ	土坑 素掘溝、土坑、ピット	古墳時代 中世	本調査
第8トレンチ	なし		調査終了・埋め戻し
第9トレンチ	素掘溝、土坑、ピット、掘立柱建物?	古墳時代、中世	本調査
第10トレンチ			
第11トレンチ	素掘溝、土坑、ピット、掘立柱建物?	縄文時代、古墳時代、中世	本調査
第12トレンチ			
第13トレンチ	素掘溝、土坑、ピット、掘立柱建物?	古墳時代、中世	本調査
第14トレンチ			
第15トレンチ	谷地形(埋没谷)	最終埋没は中世	調査終了・埋め戻し
第16トレンチ			
第17トレンチ	素掘溝、土坑、ピット、掘立柱建物?	古墳時代、中世	本調査
第18トレンチ	谷地形(埋没谷)	最終埋没は中世	調査終了・埋め戻し
第19トレンチ	素掘溝、土坑、ピット、掘立柱建物?	古墳時代、中世	本調査
第20トレンチ	溝(流路)	古墳時代	調査終了・埋め戻し
第21トレンチ	溝	中世?	調査終了・埋め戻し
第22トレンチ	素掘溝、ピット	中世	調査終了・埋め戻し
第23トレンチ	石積(旧水田)	近世以降	調査終了・埋め戻し
第24トレンチ	谷地形(埋没谷)	最終埋没は中世	調査終了・埋め戻し
第25トレンチ	なし		調査終了・埋め戻し
第26トレンチ	素掘溝、ピット	中世	調査終了・埋め戻し
第27トレンチ	なし		調査終了・埋め戻し
第28トレンチ	なし(整地土)		調査終了・埋め戻し
第29トレンチ	なし(整地土)		調査終了・埋め戻し
第30トレンチ	なし(整地土)		調査終了・埋め戻し
第31トレンチ	なし(整地土)		調査終了・埋め戻し

表4 坊ノ浦遺跡試掘調査出土遺物等一覧表

時 期	出 土 遺 物	遺 構
縄文時代 早期	縄文土器（押形文土器・深鉢）	土坑
後期	縄文土器（深鉢）、石鎌、サヌカイト、磨石等	
弥生時代 後期	弥生土器（壺、甕）、石鎌、サヌカイト	溝
古墳時代 後期	須恵器（杯、高杯、甕等）、土師器（碗、高杯甕、瓶等）	土坑 堅穴式住居
平安時代	黒色土器（杯）、土師器（甕）	
鎌倉時代～室町時代	瓦器（碗）、土師器（皿等）、瓦質土器（摺鉢等）、陶磁器（碗、壺、甕、摺鉢等）	掘立柱建物、溝、素掘溝、ピット
江戸時代	陶磁器（碗、摺鉢等）	

4 ま と め

(1) 試掘調査の成果

- ① 一部において、縄文時代の居住域（住居跡）などが推定され、数少ない縄文時代の集落跡と考えられる。
- ② 古墳時代後期～飛鳥時代の土器が、比較的多く出土しており、内牧川流域では、まとまったものとしては、初出のものである。これまでに堅穴式住居跡の3棟の輪郭を確認している。掘立柱建物跡の存在も予想される。
- ③ 平安時代～中世、なかでも、中世の遺構・遺物が最も多く、「檜牧莊」に関係すると思われる溝、素掘溝、土坑などを多数検出する。これまでに掘立柱建物跡1棟を確認しており、その数はさらに増加するものと思われる。

(2) 本調査

遺物・遺構が多数検出された地区、また、これらが予想される地区において調査範囲を拡張し、1999年度も引き続いて発掘調査を実施し、その範囲を拡張した。継続調査・拡張調査は、第5・7・9～14・17・19トレシチの10ヵ所である。本書には、一部、本調査の成果を掲載している（図版10・11）。

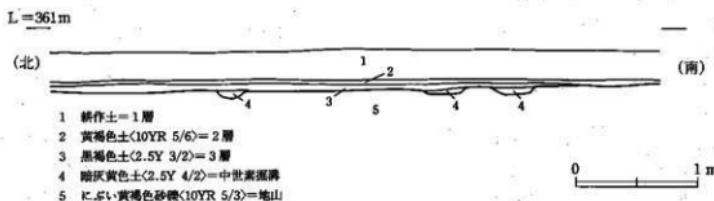


図20 坊ノ浦遺跡第9トレシチ土層断面図（部分）

5. 抄 錄

遺 跡 名	坊ノ浦遺跡（榛原町遺跡地図番号 4-3、奈良県遺跡地図番号 103-51）
調 査 地	奈良県宇陀郡榛原町大字松牧1075番地他 奈良県宇陀郡榛原町大字自明 136番地他
遺 跡 立 地	標高310～330mの河岸段丘・丘陵斜面
遺 跡 規 模	南北約600m、東西約200m
種 別	縄文時代・古墳時代の集落跡、中世の莊園跡 縄文時代～中世の遺物散布地
調 査 主 体	榛原町教育委員会
調 査 原 因	圃場整備工事
現地調査期間	1998年（平成10）10月19日～1999年（平成11）12月6日 試掘調査 1998年10月19日～1999年1月28日 本調査 1999年2月1日～1999年12月6日
調 査 面 積	試掘調査 約2400m ² 本調査 約5500m ²
検 出 遺 様	縄文時代： 土坑、自然地形
(本調査成果含む)	弥生時代： 溝 古墳時代： 穹穴式住居23棟、掘立柱建物3棟、水路3条、溝、土坑、 ピット等
	平安時代～室町時代：掘立柱建物6棟、素掘溝、土坑、ピット等
	江戸時代： 旧水田石垣
検 出 遺 物	縄文時代： 有茎尖頭器、縄文土器、石鎌、削器、攝器、楔形石器、磨石、 (本調査成果含む) サヌカイト石核・剣片ほか
	弥生時代： 弥生土器 古墳時代： 須恵器、土師器、韓式土器、製塙土器、鐵刀子、鐵鎌、滑石 製勾玉、碧玉製管玉、水晶片？、砥石ほか
	平安時代～室町時代：黒色土器、瓦器、土師器、瓦質土器、陶磁器、石製丸玉、砥 石、土鍬、鐵釘、鐵滓、フイゴ羽口、錢貨（開元通寶）ほか
	江戸時代： 陶磁器、錢貨（寛永通寶） 整理箱 50箱
資料等の保管	榛原町教育委員会（文化財整理室）

VII 下城・馬場遺跡第5次調査（測量調査）概要

1 調査の契機と経過

下城・馬場遺跡は奈良県宇陀郡株原町大字沢に位置し、澤城跡から南方へ派生する尾根筋とその間を流れる小支流によって形成された小規模な谷地形の先端部の一角を占めている。遺跡は尾根の西斜面に広がり、3段にわたる平坦面が形成されている。遺跡の現状は大半が畑地や水田となっており、以前から縄文時代から中世にいたる遺物が散布しているところでもある（図21）。

1984年には「沢集落センター」の建設に伴う発掘調査（1次調査）を行い、縄文時代～弥生時代、中世（12～13世紀）の遺構・遺物を検出しているところである。

その後、遺跡最高所の平坦面において、個人による土地改良工事が計画されたため、遺構・遺物の状況を把握する発掘調査を継続的に実施することとなり、1994年1月から3月（2次調査）、1995年2月から3月（3次調査）、1997年11月から1998年3月（4次調査）を行っている。これらの調査によって、15～16世紀の礎石建物跡等の遺構をはじめ、多くの遺物を検出し、中世の館跡の一端を明らかにできた。

本遺跡は、宇陀地域における有力中世武士団のひとりである「澤氏」の館跡と推定できることから、継続的に範囲確認調査を計画した。今年度は、基礎資料をそろえる必要から地形測量（航空写真測量）及び基準点測量等を行い、今後の発掘調査に備えることとした。

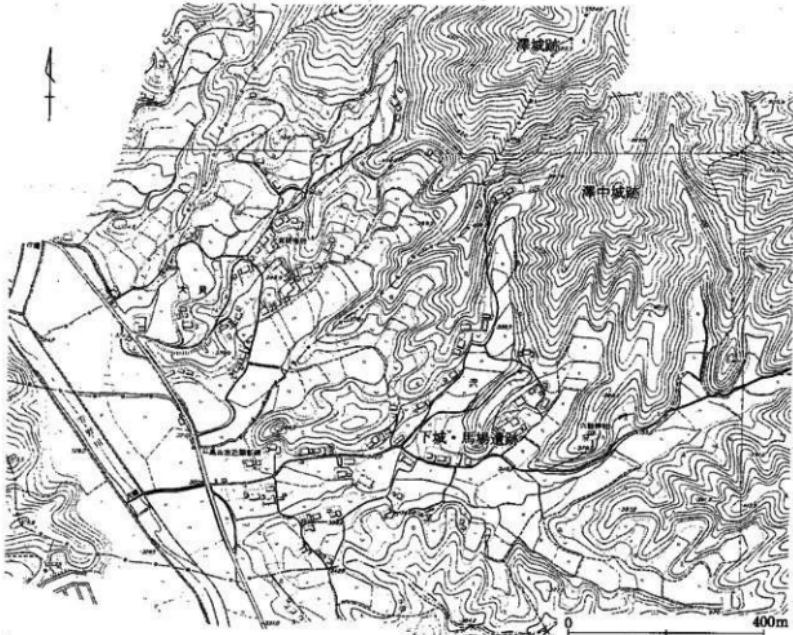


図21 下城・馬場遺跡位置図

2 位置と環境

下城・馬場遺跡は、先述のとおり、尾根の西斜面、標高約339m～351mの一角を占めており、芳野川が流れる西方への眺望が比較的良好で、遠く、宇陀地域の代表的な中世山城である秋山城跡を望むことができる。また、北方には澤城跡や伊那佐山を仰ぎ見ることができる。この遺跡の周辺は縄文時代～中世の沢遺跡、弥生時代～中世の延命寺遺跡、古墳時代前期の戸石・辰巳前遺跡や古墳時代前期～後期の野山古墳群などの遺跡が集中している地域もある。

3 遺跡の調査

澤城から南へ派生する一尾根の先端部分の西斜面に3段にわたる平坦面を形成している。上段平坦面は、南北50m、東西30～40mの方形区画となっており、下段平坦面との比高は約10mである（図22、図版12）。この上段平坦面は、小規模ではあるが、これまでに2～4次調査を行い、15世紀、16世紀中葉の礎石建物等を検出しており、当遺跡（居館）で中心的な役割を果たした地区であろう。中段平坦面を想定しているところは、現在、緩斜面となっているが、遺物の散布が多く認められることから、建物等の施設の存在が予想されるところである。この平坦面は、背後（東側）に上段平坦面が控え、西側へ開いている。本来、南北50m、東西30m程度であろうか。下段平坦面は、先の平坦面を取り囲むかのように西側から南側にかけてL字状に展開する。下段平坦面の小字の大半は「馬場」である（図23）。

上段平坦面の東側尾根にも平坦面や掘削等を確認しており、下城の一部を構成していたものと推定される。

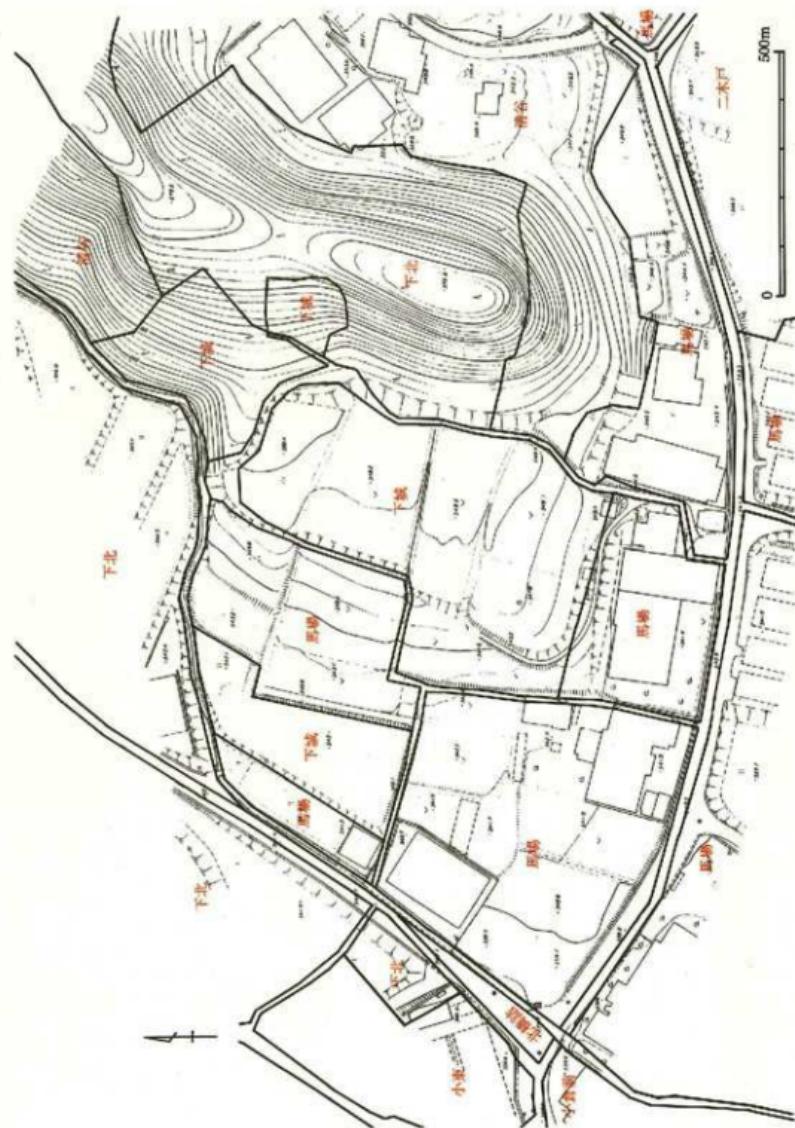
4 抄録

遺跡名	下城・馬場遺跡（奈良県遺跡地図番号 15-D-90、榛原町遺跡地図番号 2-546）
調査地	奈良県宇陀郡榛原町大字沢1292番地他
遺跡立地	標高約339m～351mの尾根斜面・谷部分
遺跡規模	南北：約120m、東西：約100m
種別	縄文時代・弥生時代・古墳時代・中世の遺物散布地、中世の居館跡
調査主体	榛原町教育委員会
調査原因	範囲確認調査（地形測量等）
現地調査期間	1999年（平成11年）3月1日～1999年（平成11年）3月31日
資料等の保管	榛原町教育委員会（文化財整理室）

図22 下城・馬場道路測量図



圖23 下城・馬場道路小字圖（部分）



報告書抄録

ふりがな	はいばらちょうないいせきはくつちょうさがいようほうこくしょ						
書名	棟原町内遺跡発掘調査概要報告書 1998年度						
副書名							
卷次							
シリーズ名	棟原町文化財調査概要						
シリーズ番号	21						
編著者名	柳澤一宏						
編集機関	棟原町教育委員会						
所在地	〒633-0292 奈良県宇陀郡棟原町大字萩原164番地				TEL 07458-2-1301		
発行年月日	西暦 2000年 3月31日						
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積m ²	調査原因
市町村 遺跡番号			°	′			
天ノ森遺跡	奈良県宇陀郡棟原町 大字萩原元萩原2501-4他	29383	34度 31分 51秒	135度 57分 10秒	19980519 ～19980604	6	個人住宅建設工事
丹切遺跡	奈良県宇陀郡棟原町 大字萩原元萩原537-1他	29383	34度 31分 26秒	135度 57分 40秒	19990311 ～19990331	6	個人住宅建設工事
松牧市場 西垣内遺跡	奈良県宇陀郡棟原町 大字松牧798他	29383	34度 31分 10秒	135度 58分 35秒	19981224 ～19981226	204	陣場整備工事
坊ノ浦遺跡	奈良県宇陀郡棟原町 大字松牧1075他 大字首崩 136他	29383	34度 31分 08秒	135度 58分 53秒	19981019 ～19990331	2400	陣場整備工事
下城・馬場遺跡	奈良県宇陀郡棟原町 大字沢1292他	29383	34度 29分 26秒	135度 58分 17秒	19990301 ～19990331		範囲確認調査(測量調査)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
天ノ森遺跡	遺物散布地	縄文時代～古墳時代、中世	なし	土師器、瓦器			
丹切遺跡	遺物散布地 集落跡	縄文時代～中世	なし	土師器			
松牧市場 西垣内遺跡	遺物散布地	弥生時代～古墳時代、中世	自然流路、素掘溝	サヌカイト片、古式土師器、須恵器、土師器、瓦器、陶器、磁器	古墳時代前期の集落跡の可能性		
坊ノ浦遺跡	集落跡 遺物散布地 莊園跡	縄文時代～中世	自然流路、素掘溝 土坑、ピットほか	縄文土器、石罐、磨石、サヌカイト片、弥生土器、須恵器、土師器、黒色土器、瓦器、瓦質土器、陶器、磁器ほか	縄文時代早期・後期、古墳時代中期～後期の集落跡		
下城・馬場遺跡	遺物散布地 城館跡	縄文時代～古墳時代、中世	平坦面				

図 版



航空写真(1981年撮影)

図版二
天ノ森遺跡



航空写真
(1999年撮影)



調査区(東から)



調査区(北東から)



航空写真(1999年撮影)



図版五 檜牧市場西垣内遺跡



航空写真(1981年撮影)



第1トレーナー
(南西から)



第1トレーナー
自然流路
土層断面
(北東から)



第2トレーンチ
(北から)



第3トレーンチ
(西から)



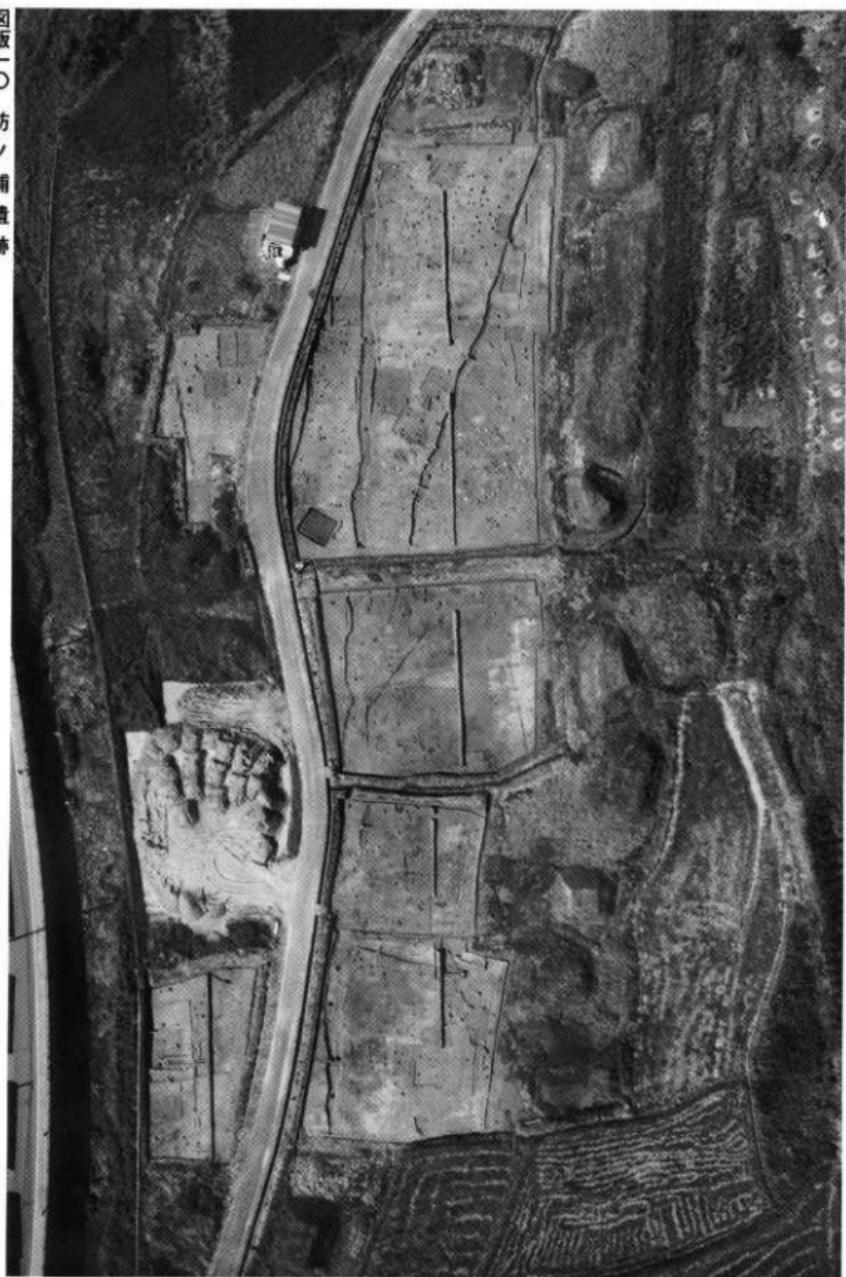
第3トレーンチ
素掘溝
(西から)



航空写真(1981年撮影)

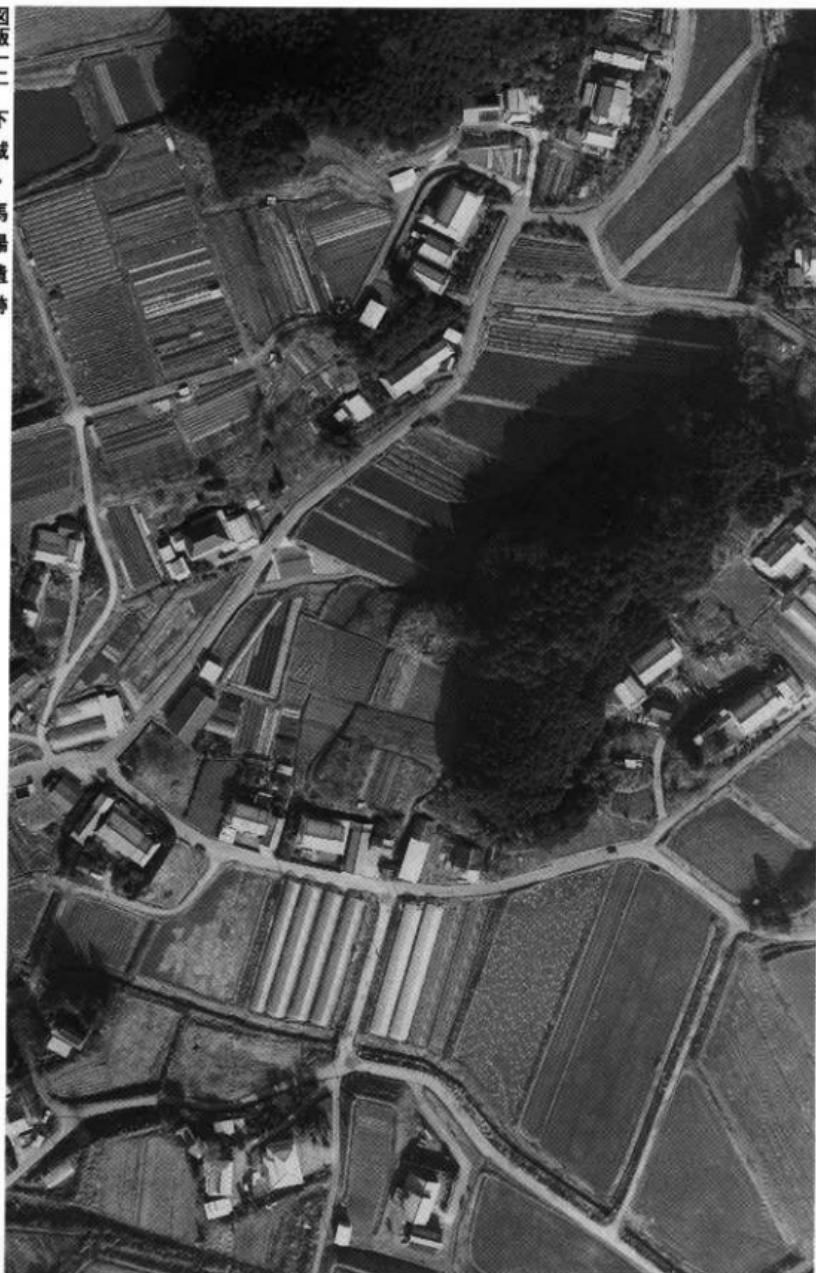


航空写真(試掘調査)



航空写真(本調査)





航空写真(1999年撮影)

棟原町内遺跡発掘調査概要報告書 1998年度

棟原町文化財調査概要 21

2000年3月31日発行

編集行 棟原町教育委員会
奈良県宇陀郡棟原町大字荻原164番地

印刷 共同精版印刷株式会社
奈良市三条大路2丁目2番6号